

次号

第3種郵便物認可

## 動植物集めビオトープ

# 山里へ綾の現再

綾町、照葉樹林の保護・復元活動に取り組むのはの森の会、日本自然保護協会の3者でつくる「綾生物多様性協議会」（会長・前田穰町長）は、町役場北側の敷地約4千平方㍍でビオトープの整備を進めている。町内で失われつ

つある動植物を集めて綾の里山を再現。ハルニレ、ジュズダマなど植物が根付く春にはさまざまな生き物を観察できるスポットとなる。

町は2012年、ユネスコエコパークに登録。この登録を機に、生き物と気軽に触れ

き、綾南川へと流れいくようとした。ドンコやテナガエビといった水辺の生き物の姿も見られるという。

整備作業は同協議会のメン

バーのほか、町内外のボラン

ティアが担う。2月27日には

8人が集まり、町内でもあま

り見掛けなくなつたオキナグ

サを丘に植えた。

昨年夏、ころから参加するて

るはの森の会メンバーの大津

整町など

「子ども遊びの場に」

合せるビオトープを設けようと、14年度から本格的な整備に着手した。敷地は町有地と町が借りた民有地がほぼ半々で、民有地はもともと耕作放棄地だった。

2月中旬までに敷地の造成が終了。水深約1㍍の池や湿地のほか、高さ約2㍍と約1㍍の丘を二つ築いた。池の周囲には町民から提供を受けた丸太を並べて観察路を造った。池は近くの湧き水を引

留司さん（78）＝宮崎市大塚台西1丁目＝は「十数年前にビオトープを造つた経験がある。この空間がどのように変化するか、これからが楽しみ」と言う。

同協議会では今後も町民から情報提供を基に、里山特有の動植物を随時移していく。河野耕三さん（67）は「居場所がなくなり絶滅しかけている動植物のよりどころにしたい。子どもたちへの教育の場としてだけではなく、遊びの場としても活用してもらいたい」と話している。



里山の動植物の居場所づくりを目指し整備が進むビオトープ